14世紀のテマセクとシンガプーラ：考古学と年代記

Dr Alexander Ressos, TEP
Attorney-at-Law (Switzerland and Germany),
Solicitor (England & Wales and Hong Kong)
Of Counsel, KGP Legal LLC
alexander.ressos@kgplegal.com.sg
www.ressos.com.sg

文献史料：中国、ジャワ、マレー

1819年以前のこの島の歴史は、3種類の文献史料に基づいています。中国の旅行記・地理書、ジャワの宮廷詩、そしてマレーの歴史伝承です。それぞれが独自の視点と限界を持っているため、14世紀のシンガポールに関する現代の理解は、これらを併せて読み、考古学的記録と照らし合わせることにかかっています。

最も重要な中国の史料は、汪大淵の*Daoyi Zhilüe*（『島夷誌略』）です。汪大淵は1330年頃に南洋を航海した商人兼旅行家で、14世紀半ばにその記録を完成させました。[1]汪大淵は、テマセクを漢字で表記した「単馬錫（Danmaxi）」と呼ぶ場所を描写し、その中の二つの地区を区別しています。一つ目の龍牙門（Longyamen、「龍の歯の門」）は、二つの丘の間にあり、船が通過する水道でした。二つ目の班卒（Banzu）は、交易商人が住む丘の上の集落でした。[2]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

汪大淵の記録は、二つの地区を鋭く対比しています。龍牙門については、西洋から帰還する船が、200〜300艘の船で襲撃する海賊に遭遇するおそれがあると警告しています。班卒については、住民は正直な商人で、髪を短く切り、金襴の繻子のターバンを巻き、赤い衣服を身に着けていると記しています。[3]班卒は一般にフォート・カニング・ヒルの一帯に、龍牙門は現在のケッペル・ハーバー付近の港の西側入口に比定されています。[4]汪大淵はまた、地元の産物には降真香（ラカウッド）と錫があり、住民が泉州の中国商人と交易していたことも記録しています。[5]

汪大淵の記述には、政治的に重要なもう一つの細部が含まれています。テマセクはシャムの攻撃を受け、都市は1か月にわたって包囲に耐えたというのです。[6]この出来事は、集落が大陸の勢力の関心を引くほどの価値を持ち、自らを守るだけの力を備えていたことを示しています。同時に、より大きな隣国の間に置かれたその立場の危うさも示しています。

ジャワの史料は*Nagarakretagama*（『ナーガラクルターガマ』）です。これは東ジャワのマジャパヒト王国を称えて1365年に作られた宮廷詩で、詩人がマジャパヒトの属国とみなした領域の中にトゥマシク（Tumasik）を挙げています。[7]宮廷詩が記録するのは主張です。したがって、このリストはマジャパヒトの実効支配よりも、むしろその野心を反映しています。それでも、この集落が群島最強の国家の都でその名を知られ、領有を主張するに値するとみなされていたことは確認できます。

第三の史料はマレーの歴史伝承であり、とりわけ*Sejarah Melayu*、すなわち『マレー年代記』です。これはマラッカ王朝の宮廷年代記で、15世紀から16世紀にかけて編纂され、17世紀初頭に改訂されました。[8]年代記は、後にマラッカを支配した王朝の最初の拠点としてのシンガプーラの物語を伝えています。マラッカとジョホールの支配者を正統化するために書かれたもので、年代の不確かな王朝年代記です。それでも、シンガプーラに関する記述は、その大筋において中国の史料や考古学的証拠と一致しています。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

『マレー年代記』と建国伝説

*Sejarah Melayu*によれば、アレクサンドロス大王の末裔を称するパレンバンの王子サン・ニラ・ウタマがテマセク島に上陸し、見慣れない力強い動物を目にしました。それは獅子だと告げられた王子は、その目撃を吉兆と受け止め、島に都市を建設して「獅子の都」を意味するシンガプーラと名づけたといいます。[9]都市が陥落するまでに、シンガプーラでは5人の支配者が統治したとされています。後の伝承は建国を1299年頃としており、この年はシンガポールの長い歴史をめぐる公式の物語の一部となっています。[10]

この伝説は、いくつもの主張を同時に表現しています。パレンバンの血筋は、シンガプーラをシュリーヴィジャヤの威信と結びつけます。アレクサンドロスの血筋は、王朝を、年代記が書かれた広いイスラム世界と結びつけます。島に生息したことのない獅子という動物は、ありふれた集落を天意によって選ばれた場所へと変えます。金融センターの歴史家にとって、この伝説の最も興味深い特徴は、正統性へのこだわりです。海峡の港には、商人からも隣国からも権威を認められる支配者が必要でした。建国伝説は、その承認を得るための手段として機能したのです。

年代記には、都市が直面した危険を反映するエピソードも含まれています。カジキの襲来を、バナナの幹で防壁を築くという少年の発案で撃退した話や、怪力の持ち主バダンの話です。バダンの怪力ぶりは、河口にある大きな石と結びつけて語り継がれました。[11]歴史家は、カジキのエピソードを海からの攻撃の寓話として読んでいます。その起源がどうであれ、このエピソードは史料全体に通じるテーマを裏づけています。都市の繁栄は、絶えず海からの脅威にさらされていたのです。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

考古学：地中からの証拠

14世紀の都市は、長い間これらの文献を通じてしか知られておらず、多くの歴史家は、何らかの重要性を持つ集落が実在したのかを疑っていました。考古学がその評価を変えました。初期の発見は偶然によるものでした。1819年、シンガポール川の河口でジャングルを切り開いていた作業員が、約50行の碑文が刻まれた大きな砂岩の巨石を発見しました。このシンガポール・ストーンは、高さ約3メートル、幅約3メートルに及ぶものでした。1843年、河口の水路を確保し拡幅するため、入植地技師代理の命令によって爆破されました。[12]回収された断片のうち、いくつかはカルカッタに送られ、一つは現在シンガポールで展示されています。碑文はいまだに解読されていませんが、オランダの学者ヘンドリック・ケルンは1230年頃という年代を提唱しました。[13]

1928年、フォート・カニング・ヒルの作業員が、14世紀半ばの金製装身具を数点発見しました。[14]東ジャワと結びつく様式を持つこれらの装身具は、マジャパヒトとつながりのある富裕なエリート層の存在を示していました。そして、1819年のマレー人が「禁じられた丘」を意味するブキット・ラランガンと呼んでいたこの丘に、かつて宮廷があったことを裏づけたのです。

体系的な発掘は1984年に始まりました。米国の考古学者ジョン・ミクシックは、1984年1月18日から28日にかけてフォート・カニングで最初の発掘を行い、14世紀の陶片1,346点、計14.31キログラムを回収しました。[15]その後、1994年に旧国会議事堂の敷地、1998年にエンプレス・プレイス、2003年にシンガポール・クリケット・クラブのパダンとセント・アンドリュース大聖堂の敷地で発掘が続きました。[16]これらの成果を総合すると、14世紀のテマセクは、マラッカ海峡において考古学的に最もよく記録された港湾集落であることがわかります。[17]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

出土品から、集落の姿を描き出すことができます。丘の上には工房を伴う宮廷があり、川の北岸沿いには商業地区がありました。そこでは商品が陸揚げされ、保管され、加工されていました。出土品の大半は中国陶磁器です。炻器の貯蔵壺、青花や青磁を含む元代の磁器、そして日用の陶器です。貨幣、ガラス、ビーズ、金属製品は、中国、インド、群島との交易を物語っています。金属加工の痕跡は、集落が原材料の加工も行っていたことを示唆しています。[18]

本書の目的にとって重要な結論は三つです。第一に、テマセクは実在の市場を持つ実在の港であり、当時の主要な交易ネットワークとつながっていました。第二に、その繁栄は中継貿易と再輸出貿易に基づいていました。これは、1819年以降に英国の入植地が果たすことになるのと同じ機能です。第三に、その交易は中国志向であり、中国の商品が、そしておそらく中国の商人も、集落に存在していました。14世紀の港は中継貿易港（エントレポ）でした。したがって、同じ言葉で自らを語る現代の都市は、1819年の物語が示唆するよりも長い系譜を持っているのです。

よくある誤解

ラッフルズが到着したとき、シンガポールはのどかな漁村であり、その歴史は1819年に始まったとよくいわれます。前半は、1819年の島の様子をある程度正確に描いています。テメンゴンの集落の人口は約150人で、その大半はマレー人、中国人は約30人でした。島全体の人口は約1,000人で、その大半は地元の海洋民でした。[19]しかし、後半は誤りです。この島は5世紀前には地域的に重要な港であり、英国の建設者たちもそのことを知っていました。ラッフルズはシンガプーラに関するマレーの伝承を承知しており、その歴史的な由緒もあってこの地を選んだのです。

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

シャムとマジャパヒトの間の港

14世紀の港は、二つの大きな勢力の間で生きていました。北では、マレー半島を南へと影響力を広げたタイの諸王国が、半島の港に対する宗主権を主張していました。南東では、マジャパヒトが群島の港の領有を主張していました。汪大淵が記録したように、テマセクはシャムの包囲に耐え、またマジャパヒトの宮廷詩には属国として登場します。その支配者たちは、おそらく両勢力および中国との関係を維持していたのでしょう。交易を確保するための承認を求めつつ、交易を利益あるものにしていた自治は手放さなかったのです。

大国の間に位置するというこの立場は、シンガポールの歴史に繰り返し現れる特徴です。現代の共和国は、より大きな国家の間で均衡を保ち、そのすべてとの関係を育む外交政策を追求してきました。この政策は本書の第F部で検討します。テマセクの支配者に近代的な意味での外交政策があったとするのは時代錯誤でしょう。しかし、構造的な状況は似通っていました。価値ある交易を営む小さな港が、隣国の寛容と、そのすべてにとっての有用性に依存していたのです。

シンガプーラの陥落

14世紀の都市の終焉は、伝承によって異なる形で記録されています。*Sejarah Melayu*は、ある支配者が宮廷の女性を虚偽の告発によって処刑し、高官であった彼女の父が復讐のために、侵攻してきたジャワの艦隊に都市の門を開いたと伝えています。トメ・ピレスの記録を含む16世紀のポルトガルの史料は、パレンバンの王子パラメスワラがシンガプーラに逃れ、地元の支配者を殺害し、数年間島を統治した後に追放されたと伝えています。[20]どちらの説が実際の出来事に近いにせよ、結果は同じでした。1398年頃、シンガプーラの支配者は北へ逃れてマラッカに新たな集落を建設し、年代記がその歴史を記録する王朝をそこに打ち立てたのです。[21]

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

考古学的記録は、島の集落が一度に消滅したわけではないことを示唆しています。15世紀の出土品は14世紀のものより少なく、商業地区が徐々に衰退したことがうかがえます。しかし、宮廷はマラッカに移り、交易を引き寄せ保護していた政治的権威もともに持ち去りました。保護と承認を提供できる支配者を失い、島は市場としての機能を失いました。航路上の一地点として船乗りには知られ、時折地元の首長に利用されることはあっても、もはや中心地ではなくなったのです。

シンガプーラの陥落には、本書の最初の教訓が含まれています。港の繁栄は制度に基づいていました。認められた権威、安全な市場、予測可能な税です。そして、それらの制度は移動し得るものでした。宮廷が去ると、交易もその後を追いました。地理は変わらないままでしたが、地理を富に変える制度は宮廷とともに移っていったのです。

注

1. *Daoyi Zhilüe*は通常1349年の成立とされ、汪大淵の航海は1330年代に行われた。Wikipedia, “Daoyi Zhilüe”および“Wang Dayuan”（最終閲覧日：2026年9月）、ならびに*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 169 (2019), “Deconstructing Banzu and Longyamen: The Daoyi zhilüe (1349) in the New Early History of Singapore”における議論を参照。 ↩

2. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）。汪大淵の次の記述を引用している：“Longyamen is intersected with two mountains belonging to the Temasek natives, akin to a dragon teeth-like formation, with a water channel running through the middle.” ↩

3. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）。“with two to three hundred perahus”で襲撃した龍牙門の海賊と、“wear their hair short, with turban of gold-brocaded satin, and red-coloured clothing”という班卒の住民に関する汪大淵の記述を引用している。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

4. 班卒をフォート・カニング・ヒルに、龍牙門をケッペル・ハーバーの水道に比定する説は広く受け入れられているが、異論がないわけではない。前掲の*Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 169 (2019)所収の論文、およびWikipedia, “Long Ya Men”および“Ban Zu”（最終閲覧日：2026年9月）参照。 ↩

5. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）。汪大淵の記述の要約：降真香（ラカウッド）と錫が地元で産出され、住民は泉州の中国人と交易していた。 ↩

6. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）：汪大淵は“the city successfully resisted the attack for a month”と報告している。 ↩

7. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）：1365年に書かれた*Nagarakretagama*は“listed Tumasik as a vassal of the Majapahit”。 ↩

8. *Sejarah Melayu*の年代と校訂本については、C.C. Brown (trans.), *Sejarah Melayu or Malay Annals*, Kuala Lumpur, Oxford University Press, 1970 (reprint of the 1952 edition), introduction参照。現存するテキストの基礎としては、通常1612年の校訂本が用いられる。 ↩

9. C.C. Brown (trans.), *Sejarah Melayu or Malay Annals*, chapter 3。サン・ニラ・ウタマの到来とシンガプーラの命名について。年代記は、この支配者をイスカンダル・ズルカルナイン（アレクサンドロス大王）の子孫として描いている。 ↩

10. Kwa Chong Guan, “Remembering John Norman Miksic”, *BiblioAsia*, vol. 21, issue 4, January 2026。1299年頃にシンガプーラを建設した伝説上の王子の政庁所在地について。 ↩

11. C.C. Brown (trans.), *Sejarah Melayu or Malay Annals*。カジキの襲来とバダンについて。バダンとシンガポール・ストーンとの結びつきは、後世の民間における連想である。 ↩

12. National Library Board Singapore, Infopedia, “Singapore Stone”（1819年6月のロッキー・ポイントでの発見、約3メートル×3メートルの大きさ、

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

約50行の碑文、1843年の入植地技師代理スティーブンソン大尉の命令による破壊について）。 ↩

13. National Library Board Singapore, Infopedia, “Singapore Stone”：ジェームズ・ロー中佐による断片の回収、カルカッタの王立アジア協会博物館に送られた2点、シンガポールで展示されている現存の遺物、およびケルンが提唱した1230年頃という年代について。 ↩

14. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）：1928年、フォート・カニング・ヒルで“several pieces of gold ornaments dating to the mid-14th century were discovered”。 ↩

15. Kwa Chong Guan, “Remembering John Norman Miksic”, *BiblioAsia*, vol. 21, issue 4, January 2026（1984年1月18日から28日までのフォート・カニングでの最初の発掘、14世紀にさかのぼる陶片1,346点、重量14.31キログラム）。 ↩

16. Kwa Chong Guan, “Remembering John Norman Miksic”, *BiblioAsia*, vol. 21, issue 4, January 2026（1994年の旧国会議事堂の敷地、1998年のエンプレス・プレイス、2003年のシンガポール・クリケット・クラブのパダン、2003年のセント・アンドリュース大聖堂）。 ↩

17. Kwa Chong Guan, “Remembering John Norman Miksic”, *BiblioAsia*, vol. 21, issue 4, January 2026。成果はJohn N. Miksic, *Singapore and the Silk Road of the Sea, 1300–1800*, Singapore, NUS Press, 2013にまとめられており、同書は2018年に第1回シンガポール歴史賞（Singapore History Prize）を受賞した。 ↩

18. 考古学的な全体像の要約は、John N. Miksic, *Singapore and the Silk Road of the Sea, 1300–1800*, Singapore, NUS Press, 2013による。 ↩

19. Wikipedia, “Founding years of modern Singapore”（最終閲覧日：2026年9月）。約150人のテメンゴンの集落（“most of them Malays, with around 30 Chinese”）と、“around a thousand”という総人口について。 ↩

© 2026 Dr Alexander Ressos. General information only, not legal, tax or investment advice. No client relationship is created. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. More information at SingaporeIQ.com and ressos.com.sg.

20. Wikipedia, “Temasek”（最終閲覧日：2026年9月）：ポルトガルの史料によれば、パラメスワラはマラッカへの移転を余儀なくされるまで“ruled Singapura for five years”。 ↩

21. Wikipedia, “Malacca Sultanate”（最終閲覧日：2026年9月）：パラメスワラは1398年のシンガポール陥落後、1400年頃にマラッカを建設した。 ↩

Disclaimer

This article is provided for general information only. It is based on publicly available sources as at its date of publication. These sources have not been independently verified against licences, regulatory registers or the records of the entities concerned. It is not legal, tax, financial or investment advice. Nor is it a recommendation to invest in, transact with or use the services of any entity mentioned. Law and regulation change frequently, so the content may be incomplete or outdated. To the fullest extent permitted by law, Dr Alexander Ressos and the publisher of SingaporeIQ exclude all liability for loss or damage arising from the use of or reliance on this article. Readers should obtain advice on their specific circumstances before acting or refraining from action.

Names and trademarks of the entities discussed belong to their owners and are used for identification only. Their mention implies no endorsement, affiliation or allegation of wrongdoing. All Singapore law advice is provided by a duly licensed and regulated firm of Singapore advocates and solicitors only on the basis of an express written letter of engagement. Corrections and updates: contact@ressos.com.

© 2026 Dr Alexander Ressos. This article may be quoted with attribution to SingaporeIQ (SingaporeIQ.com). Reproduction in full and any commercial use require prior written consent. The Legal Terms at https://singaporeiq.com/legal-terms apply.

Author contact: Dr Alexander Ressos, TEP · contact@ressos.com